

## 最低三つの男の定点

宇敷 辰男

八年前ある雑誌の記事が目にとまった。「隠れ家は男の必需品」というタイトルで、男性はなごらく狩りをしてきた性なので、空間認識力に長けていて、男性脳は複数の観測定点を持つ必要がある、最低三点が必要で、家と職場ともう一つというわけで「男の隠れ家」が必需品という説が載っていた。

この記事のライターは、その後「妻のトリセツ」がベストセラーになった黒川伊保子氏で人工知能開発の脳科学コメンテーターである。この記事の中で「多くの男性が、妻が髪型を変えたのに気がつかず、定番が好きで行きつけの床屋をなかなか変えない」という話にも納得できたので、この説を信じて最低三つの男の定点を考えてみた。

この説が合っていれば、結婚してからの生活で「家と職場ともう一つ」さてそれは何だったろうと振り返ってみた。現役時代の一日を三つに分けてみると、それは飲み会だった気がした。昭和時代の仕事中心の生活で妻には苦勞を掛けたと思う。仕事と違って毎晩飲んでた。会社でサークル活動をやっていた仲間もいたが私は酒場が三つ目の観測定点であった。

二千年代に入り五十歳代になると、次第に後輩と飲む機会が減ってきた。平成時代の風潮と考え若い人とは歓送迎会などの宴会位しか飲みになくなった。その代り先輩世代や同期同年代の仲間と酒場に通い三つ目の観測定点を守ってきた。

定年を迎える時期が近づいて「職場」が危うくなった。そこで地元練馬のシニアサークルに入会し世話人の仕事に就いた。ついでに飲み仲間も増えた。

更に大学の就職担当の先生を訪ねて学生をリクルートする仕事を探した。出歩くので帰りに仲間と酒場で会うのにも都合が良かった。

ところが、迷惑な中国のウィルス感染で大学が入構禁止になり出歩く仕事を諦めた。酒場も自粛になった。二つの定点が危うくなっているが、仕事が減って時間はある。もうしばらくこの説を信じ、三つに限らず新しい沢山の定点を探してみたいと考え始めたところである。